

青葉の森公園芸術文化ホール イベントレポート

EVENT REPORT

当ホール主催の公演・講座の雰囲気
みなさまに発信する、
「サポーターライタース」の方による
レポートをお届けします。

千葉のむかし話・ こども語りべ

～語り継ごう千葉～

出演
千葉のむかし話・こども語りべ 講座受講生
ひがき 順子（講師）

平成31年
1月14日
[月・祝]

開演
午前の部 午後14:00
10:00



こ

んなにも千葉にまつわる昔話があるのか！という驚きと、こんな有名な昔話が、実は千葉が発祥だったのか！という新しい発見に心躍った。

もちろん、何篇かは以前に聞いたことのある演目もあった。でも、語る人が違うところ、全く別の話になってしまうところ、この語りの面白さなのだと思う。

驚いたのは、ほぼ九割が暗唱でおこなっていたこと。『え？本当にこの人達、素人さんなの？』と疑いたくな

るほど、各登場人物の声色を変えて語ってくる。舞台上、語りべさんは一人しかいないはずなのに、何人もいるのではないかと錯覚しそうになった。目をつぶって聞いてみると、私の脳内では、各登場人物が衣装をまとい演じており、情景も、その土地や年代にワープした。こんなに想像力を刺激されるのって久しぶりだなと思った。何しろ世の中には、映像、情報が溢れている。しかし、きつと、脳内で見ている情景や登場人物はこの会場に來ている人の数だけある

けれど、物語は共有しているという一体感を感じる。これは、映画でも舞台演劇でもないひとつの芸術なのではないだろうか。

午前の部が終わり、昼の休憩中に講座の指導と会のナレーションもなさっているひがき順子先生にお話を聞くことができた。「私は、先生じゃなくて、職人なの。練習する時は『山って言うけど、それってどんな山？あなたの頭の中、活字だけしかないよね！』って、厳しいし、口が悪いの。それから、みんな題材が違うでしょ、同

じ題材だったらどんなに楽か…。でもね、好きなのよ。好きじゃなきゃできない！」と、【粹】という言葉が似あうひがき先生、素敵に作務衣を着こなさせていたのが印象的だった。

この会の講座は、顔合わせや読む・語る話を決めることなども含めて、たったの七回だそう、正味の練習は、四、五回でここまで仕上げられる。なのに、この完成度とは、どれだけ各自で練習されているのだろうか。講座参加者は、学校の先生をさせていて、ここで学んだ語りを学校

でも取り入れているという方、元々は自作の紙芝居をやっている、表現力や視野を広げようという方、銚子のなまりを知ってもらいたいとこの講座に來ているという方など。始める理由や動機は様々だが、一つ共通して言えることは、〈語り・話が好き〉ということだろうか。【好きこそ物の上手なれ】という言葉があるが、好きなことをやっている人は、本当にパワフルで、楽しそう、活き活き、そしてキラキラ輝いて見えた。

サポーター(ライターズ)辻康子